

回答者＝保育者＝母のケースとそれ以外のケースを比較したとき、回答者＝保育者＝母の方が選びやすい項目は、「子育てによる身体の疲れが大きい」「自分の自由な時間が持てない」「配偶者が育児に参加してくれない」「子育てが大変なことを身近な人が理解してくれない」「子どもについてまわりの目や評価が気になる」「子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない」「子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない」「子どもが言うことを聞かない」「しつけのしかたがわからない」「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」である。逆に、回答者＝保育者＝母のケースが選びにくいのは、「子育てで出費がかさむ」「夫婦で楽しむ時間がない」「子どもが病気がちである」「子どもが急病の時診てくれる医者が近くにいない」「子どもの成長の度合いが気になる」である（「しつけのしかたが家族内で一致していない」も第4回のみ含まれる。）当該設問の詳細な分析を行う場合は、このようなゆがみを考慮に入れる必要がある。

3.2 各項目の規定要因

次に、表12～表15（章末に掲載）は、回答者＝保育者＝母のケースに限った場合の、負担感に関する項目の選択傾向を、基礎的な属性ごとに見たものである⁷。すでに報告されている全回答ケースにおける傾向（厚生労働省大臣官房統計情報部2003；2004；2005）と比較して、大きく傾向が変化している項目は見られない。

ただし、第3回と第4回で矛盾する点も含まれている。これはおそらく交互作用が生じているため、各回で見かけ上差異が見えているだけで、回帰分析によって複数の項目間の統制を行えば、影響力は消滅すると考えられる。そこで、以下では、前年度報告書（元森2006）で検討した以下の枠組みでロジスティック回帰分析を行い、第3回第4回の全項目について、選択傾向、すなわち、負担感をより感じているのは誰かを概観する。その際、第1回第2回の結果とも比較する。なお、枠組みの背景にある先行研究などは、前掲の元森（2006）を参考にされたい。

<独立変数>

- 育児経験（兄弟姉妹の有無） ※第1回第2回の分析では兄姉の有無で計測
- 子どもの人数（多胎児か否か、兄弟姉妹の有無（再掲））
- 母親の年齢（第1回調査時の母親の年齢）
- 母親の就業状況（出産前と調査時点で有職（または学生）か無職か求職中か＝無職を基準としたダミー ※ただし、第3回は求職中か否かは尋ねていないので2値ダミー
- 父親の育児参加（主な保育担当者に父親があがっているか否か）
- 祖父母の援助（同居しているか否かで代理）
- 保育士等の利用（ふだんの保育者に保育士・保育ママさんをあげているか否か）

⁷ 第1回、第2回は元森（2006）の再掲。ただし、ここではどの項目も選択しなかった場合を除いて比率を掲載していた。今回は、各回の全回答との傾向の差を見やすくするため、どの項目も選択しなかった場合も含め、「回答者＝保育者＝母」のケース数を分母として比率を算出している。

※ただし、第4回は設問なしのため割愛
 身近な相談者の存在（悩みや不安を相談するか否か）

負担感の有無

表16に、負担感に関する設問に1つでも当てはまると回答しているか否かを従属変数としたロジスティック回帰分析の結果を示した⁸。負担感に関する設問に1つでも当てはまると回答した人たちの傾向は、以下のようになる。

子どもについては多胎児であると選択率が上がる。これは、第1回第2回と共通である。

母親に関しては、出産前にも学生または有職であるほうが選択率が高くなっている。この項目は第2回は学生または有職であるほうが選択率が低くなっており、徐々に選択率が上がっているということになる。現在の職業は、有職より無職が、（項目のある第4回調査に限り）無職でも求職をしていない方が、選択率が高い。これは第2回までと変わらず、

育児ネットワークに関しては、父の協力は第3回にわずかに弱い関係が見られたのみで、大きく関係していない。祖父母は、別居していて援助が得られない方が選択率が高い。これらは第1回から共通である。保育を外注していることは関係しておらず、関係していたのは第1回のみであったと確認できる。また、相談者の有無は第2回までは比較的強く関係していたが、第3,4回は関係していないようである。

表16 子育ての負担感の有無の回帰分析

(第3回調査)

	子どもを持って負担に思うことがある		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.008		0.825
多胎ダミー	0.900 ***	0.000	2.460
第1回時の母親の年齢	0.001	0.741	1.001
出産前学生+有職ダミー	0.099 **	0.006	1.104
現在学生+有職ダミー	-0.244 ***	0.000	0.784
父=保育担当ダミー	-0.067 *	0.039	0.935
祖父母同居ダミー	-0.177 ***	0.000	0.838
保育外注ダミー	0.071	0.161	1.074
相談者ありダミー	0.021	0.893	1.021
定数	1.946 ***	0.000	6.998
Cox & Snell R ² 乗	0.003		
Nagelkerke R ² 乗	0.006		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもを持って負担に思うことがある		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.034	0.407	0.967
多胎ダミー	1.205 ***	0.000	3.336
第1回時の母親の年齢	-0.001	0.793	0.999
出産前学生+有職ダミー	0.242 ***	0.000	1.273
現在学生+有職ダミー	-0.200 ***	0.000	0.818
現在求職中ダミー	0.288 ***	0.000	1.334
父=保育担当ダミー	-0.050	0.136	0.951
祖父母同居ダミー	-0.169 ***	0.000	0.845
相談者ありダミー	-0.023	0.870	0.977
定数	2.069 ***	0.000	7.917
Cox & Snell R ² 乗	0.005		
Nagelkerke R ² 乗	0.010		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

以下、具体的な項目ごとに同様の分析を行ったのが表17~34である。項目数が多く、煩雑であるため、興味のある項目だけ読みたい。

⁸ 以下のロジスティック回帰分析はすべてSPSS14.0を用いて行っている。

「子育てによる身体の疲れが大きい」

兄弟姉妹の数が関係しておらず、多胎児であると選択率が高いというのは、第2回までと同様である。

母親に関しては、年齢が高いと選択率が高い。職業については、第3回までは、出産時に無職の方が選択率が高く、一貫して、現在は有職より無職の方が選択率が高く、第4回は無職でも求職していない人が選択率が高い。これらつまり、一般に身体的負担がより多くなりそうな有職のほうが、疲れを負担と感じていないということである。家事育児を専業で担うことが、身体的な負担感を増加させていると言える。

社会的ネットワークは、祖父母と別居していたり、保育を外注したりしている方が選択率が高く、育児サポートがあるほうが負担感が軽減している。また、相談者がいないほうが選択率が高く、心理的に楽になることが身体的な負担感に影響を与えているか、「相談者」が具体的に育児を手助けしてくれるからであろう。これらは、第2回までと共通した傾向である。

表17 子育ての負担感の有無の回帰分析(子育てによる身体の疲れが大きい)

(第3回調査)

	子育てによる身体の疲れが大きい			Exp (B)
	B	有意確率		
きょうだいありダミー	0.011		0.676	1.011
多胎ダミー	0.617	***	0.000	1.853
第1回時の母親の年齢	0.026	***	0.000	1.026
出産前学生+有職ダミー	-0.086	**	0.001	0.918
現在学生+有職ダミー	-0.201	***	0.000	0.818
父=保育担当ダミー	0.023		0.315	1.024
祖父母同居ダミー	-0.291	***	0.000	0.747
保育外注ダミー	0.088	*	0.019	1.092
相談者ありダミー	-0.178		0.103	0.837
定数	-1.196	***	0.000	0.302
Cox & Snell R ² 乗	0.011			
Nagelkerke R ² 乗	0.015			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子育てによる身体の疲れが大きい			Exp (B)
	B	有意確率		
きょうだいありダミー	0.047	+	0.095	1.048
多胎ダミー	0.549	***	0.000	1.731
第1回時の母親の年齢	0.031	***	0.000	1.031
出産前学生+有職ダミー	0.037		0.137	1.038
現在学生+有職ダミー	-0.268	***	0.000	0.765
現在求職中ダミー	-0.110	**	0.007	0.896
父=保育担当ダミー	0.048	*	0.042	1.049
祖父母同居ダミー	-0.245	***	0.000	0.783
相談者ありダミー	-0.232	*	0.014	0.793
定数	-1.415	***	0.000	0.243
Cox & Snell R ² 乗	0.012			
Nagelkerke R ² 乗	0.016			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子育てで出費がかさむ」

子どもについては、兄弟姉妹がいたり多胎児であったりするほうが、一貫して選択率が高い。

母親は、年齢が高く、現在は無職で、項目のある第4回では求職中でないほうが選択率が高い。求職中については、第2回までは求職中のほうが選択率が高くなっており、関係が変化しているが、理由は検討がつかない。

社会的ネットワークは、父親が保育に関わっていると、わずかながら選択率が上がるが（第2回目までは有意ではない）、どういう意味があるのかは検討がつかない。祖父母と別居しており、保育を外注しているほうが選択率が高くなっているのは、第2回目までと同様である。外注という金銭的コストがかからない、祖父母の金銭的、身体的援助が意味を持っていることがわかる。

表18 子育ての負担感の有無の回帰分析(子育てで出費がかさむ)

(第3回調査)

	子育てで出費がかさむ			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	0.313	***	0.000	1.368
多胎ダミー	0.847	***	0.000	2.333
第1回時の母親の年齢	-0.012	***	0.000	0.988
出産前学生+有職ダミー	-0.057	*	0.039	0.945
現在学生+有職ダミー	0.173	***	0.000	1.189
父=保育担当ダミー	0.070	**	0.005	1.073
祖父母同居ダミー	-0.148	***	0.000	0.862
保育外注ダミー	0.255	***	0.000	1.291
相談者ありダミー	-0.020		0.868	0.980
定数	-1.008	***	0.000	0.365
Cox & Snell R ² 乗				0.013
Nagelkerke R ² 乗				0.019

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子育てで出費がかさむ			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	0.256	***	0.000	1.292
多胎ダミー	0.920	***	0.000	2.510
第1回時の母親の年齢	-0.007	**	0.007	0.993
出産前学生+有職ダミー	-0.138	***	0.000	0.871
現在学生+有職ダミー	0.158	***	0.000	1.171
現在求職中ダミー	0.616	***	0.000	1.851
父=保育担当ダミー	0.052	*	0.026	1.054
祖父母同居ダミー	-0.198	***	0.000	0.820
相談者ありダミー	-0.077		0.425	0.926
定数	-0.741	***	0.000	0.477
Cox & Snell R ² 乗				0.016
Nagelkerke R ² 乗				0.023

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「自分の自由な時間が持てない」

多胎児のほうが選択率が高く、第4回は兄弟姉妹がいるほうが選択率が高い。これは一般的に納得がいくが、第2回目までは、兄弟姉妹がいないほうが選択率が高かったため、傾向が逆転していつていることがわかる。当初は、子どもが増える喜びが負担感を感じさせないほうに作用していたのが、何年かたつうちに負担感が実感されるようになったということだろうか。

社会的ネットワークは、父親が手助けしているほうがわずかに選択率が高く、これも理由の検討がつかない。祖父母と別居していたり、保育を外注していないほうが選択率が高く、育児負担が家族のみにかかるほうが、負担感が高いことがわかる。

表19 子育ての負担感の有無の回帰分析(自分の自由な時間が持てない)

(第3回調査)

	自分の自由な時間が持てない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	0.012	0.610	1.012
多胎ダミー	0.216	**	0.007 1.241
第1回時の母親の年齢	0.007	**	0.004 1.007
出産前学生+有職ダミー	0.123	***	0.000 1.131
現在学生+有職ダミー	-0.337	***	0.000 0.714
父=保育担当ダミー	0.043	*	0.049 1.044
祖父母同居ダミー	-0.145	***	0.000 0.865
保育外注ダミー	-0.108	**	0.002 0.898
相談者ありダミー	-0.012		0.908 0.988
定数	0.254	+	0.054 1.289
Cox & Snell R ² 乗	0.009		
Nagelkerke R ² 乗	0.012		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	自分の自由な時間が持てない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	0.142	***	0.000 1.153
多胎ダミー	0.339	***	0.000 1.404
第1回時の母親の年齢	-0.001		0.736 0.999
出産前学生+有職ダミー	0.258	***	0.000 1.294
現在学生+有職ダミー	-0.282	***	0.000 0.754
現在求職中ダミー	-0.173	***	0.000 0.841
父=保育担当ダミー	0.064	**	0.003 1.066
祖父母同居ダミー	-0.038		0.149 0.962
相談者ありダミー	0.034		0.709 1.034
定数	-0.013		0.912 0.987
Cox & Snell R ² 乗	0.007		
Nagelkerke R ² 乗	0.010		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「配偶者が育児に参加してくれない」

第3回調査から加わった項目である。子どもについては、第4回時に、多胎児であると選択率が高くなっているが、そのほかには子どもの数は関係していないと考えられる。

表20 子育ての負担感の有無の回帰分析(配偶者が育児に参加してくれない)

(第3回調査)

	配偶者が育児に参加してくれない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.004		0.930 0.996
多胎ダミー	0.123		0.414 1.131
第1回時の母親の年齢	-0.010	+	0.052 0.991
出産前学生+有職ダミー	-0.025		0.608 0.976
現在学生+有職ダミー	0.053		0.351 1.054
父=保育担当ダミー	-1.185	***	0.000 0.306
祖父母同居ダミー	-0.122	*	0.019 0.885
保育外注ダミー	0.038		0.592 1.039
相談者ありダミー	-1.112	***	0.000 0.329
定数	-0.847	***	0.000 0.429
Cox & Snell R ² 乗	0.020		
Nagelkerke R ² 乗	0.051		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	配偶者が育児に参加してくれない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.008		0.825 0.958
多胎ダミー	0.900	***	0.000 1.005
第1回時の母親の年齢	0.001		0.741 0.992
出産前学生+有職ダミー	0.099	**	0.006 0.996
現在学生+有職ダミー	-0.244	***	0.000 1.163
現在求職中ダミー			1.319
父=保育担当ダミー	-0.067	*	0.039 0.314
祖父母同居ダミー	-0.177	***	0.000 0.934
相談者ありダミー	0.021		0.893 0.483
定数	1.946	***	0.000 0.294
Cox & Snell R ² 乗	0.021		
Nagelkerke R ² 乗	0.051		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

母親に関しては、第3回時に年齢が低いほうが、やや選択率が高く、第4回時のみ、出産前には有職のほうが、現在は無職のほうが高くなっている。しかし、傾向がアドホックで、理由を判断しかねる。

社会的ネットワークでは、当然のことながら、父親が保育担当でないほうが選択率が高く、祖父母が別居していることも選択率の高さと関係している。第3回のみ、相談者がいないほうが選択率が高くなっている。

「しつけの仕方が家族内で一致しない」

同様に、第3回から設けられた項目である。子どもについては、兄弟姉妹がいないほうが選択率が高く、育児経験がないほうが、しつけ方針をめぐって不和が起こりやすいということだろうか。または、そもそも、しつけの方針ということが重大な問題として感知されやすいということかもしれない。

母親については、母親が若い方が選択率が高く、兄弟姉妹同様、経験のなさが関係しているようである。第4回では、現在有職や求職中であるほうが選択率が高くなっているが、理由の検討がつかない。

表21 子育ての負担感の有無の回帰分析(しつけの仕方が家族内で一致しない)

(第3回調査)

	しつけのしかたが家族内で一致していない			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.094	*	0.023	0.911
多胎ダミー	-0.121		0.384	0.886
第1回時の母親の年齢	-0.016	***	0.000	0.984
出産前学生+有職ダミー	0.003		0.943	1.003
現在学生+有職ダミー	0.069		0.145	1.071
父=保育担当ダミー	-0.217	***	0.000	0.805
祖父母同居ダミー	1.186	***	0.000	3.274
保育外注ダミー	0.158	**	0.006	1.171
相談者ありダミー	-0.770	***	0.000	0.463
定数	-1.312	***	0.000	0.269
Cox & Snell R ² 乗	0.031			
Nagelkerke R ² 乗	0.066			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	しつけのしかたが家族内で一致していない			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.157	***	0.000	0.854
多胎ダミー	0.029		0.804	1.030
第1回時の母親の年齢	-0.015	***	0.000	0.985
出産前学生+有職ダミー	0.051		0.161	1.052
現在学生+有職ダミー	0.171	***	0.000	1.187
現在求職中ダミー	0.378	***	0.000	1.459
父=保育担当ダミー	-0.167	***	0.000	0.846
祖父母同居ダミー	0.939	***	0.000	2.557
相談者ありダミー	-0.800	***	0.000	0.449
定数	-0.977	***	0.000	0.377
Cox & Snell R ² 乗	0.026			
Nagelkerke R ² 乗	0.051			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

社会的ネットワークでは、父親が育児を担っていないほうが選択率が高い。協働していて意見が合わないことではなく、そもそものディスコミュニケーションが問題ということだろうか。祖父母は同居しているほうが選択率が高く、これは具体的にしつけの方針の世代差が問題化していると考えられる。また、相談者がいないほうが選択率が高く、第三者

的な立場からのアドバイスが問題を解決に導いたり、または、相談者が同居人である場合などは、コミュニケーションの過程で意見のすりあわせが行われているといたりしているということであろう。

「家事や仕事が十分にできない」

第2回までは、「仕事が十分にできない」という項目であった。子どもは、兄弟姉妹がいたり、多胎児であるほうが選択率が高くなっていて、常識的な結果である。

母親については、年齢が高く、出産前に有職であったほうがやや選択率が高い。現在は、有職や求職中であるほうが選択率が高くなっている。実際に賃金労働に従事していない専業主婦よりも、有職者のほうが選択率が高いということは、やるべきこと、やりたいことの総量が多いことによると考えられる。

社会的ネットワークについては、祖父母と別居で保育を外注しているほうが選択率が高い。身内の援助が得られず、外部に委託するような状況のほうが、相対的な負担感が高いということだろう。相談者はいないほうが選択率が高くなっている。

表22 子育ての負担感の有無の回帰分析(仕事や家事が十分にできない)

(第3回調査)

	仕事や家事が十分にできな			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	0.103	**	0.001	1.109
多胎ダミー	0.454	***	0.000	1.574
第1回時の母親の年齢	0.028	***	0.000	1.029
出産前学生+有職ダミー	0.080	**	0.009	1.083
現在学生+有職ダミー	0.683	***	0.000	1.979
父=保育担当ダミー	0.041		0.129	1.042
祖父母同居ダミー	-0.150	***	0.000	0.861
保育外注ダミー	0.152	***	0.000	1.164
相談者ありダミー	-0.310	*	0.010	0.733
定数	-2.294	***	0.000	0.101
Cox & Snell R ² 乗	0.026			
Nagelkerke R ² 乗	0.042			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	仕事や家事が十分にできな			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	0.091	**	0.005	1.095
多胎ダミー	0.221	*	0.013	1.248
第1回時の母親の年齢	0.022	***	0.000	1.022
出産前学生+有職ダミー	0.174	***	0.000	1.191
現在学生+有職ダミー	0.715	***	0.000	2.044
現在求職中ダミー	0.579	***	0.000	1.784
父=保育担当ダミー	0.042		0.119	1.043
祖父母同居ダミー	-0.214	***	0.000	0.807
相談者ありダミー	-0.322	**	0.002	0.725
定数	-2.216	***	0.000	0.109
Cox & Snell R ² 乗	0.024			
Nagelkerke R ² 乗	0.038			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもについてまわりの目や評価が気になる」

第3回調査から加わった項目である。子どもは、兄弟姉妹や第3回のみ多胎児がいないケースのほうが選択率が高くなっている。つまり、対象子が唯一の子どもの場合のほうが、経験が少ないためか、周囲を気にしてしまうということのようである。

母親に関しては、年齢が若い方がやや選択率が高く、若い方が周りを気にしているよう

である。また、現在有職のほうが選択率が低く、専業主婦のほうが育児不安が高まりやすいという従来よりの指摘とも一致している。ただし、求職中の場合は高くなっている。また、第3回のみ出産前に有職であったほうがやや選択率が高い。

社会的ネットワークについては、保育を外注していなかったり、相談者がいないと選択率が高くなり、育児の負担が母親や父母に集中しているほうが不安が高まることが確認される。ただし、祖父母との同居については、第3回では同居していたほうがわずかに選択率が高く、第4回では別居していたほうがわずかに高いなど、結果が一貫していない。

表23 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもについてまわりの目や評価が気になる)

(第3回調査)

	子どもについてまわりの目や評価が気になる			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.266	**	0.000	0.766
多胎ダミー	-0.017	***	0.926	0.984
第1回時の母親の年齢	-0.025	***	0.000	0.976
出産前学生+有職ダミー	0.049	**	0.345	1.050
現在学生+有職ダミー	-0.336	***	0.000	0.715
父=保育担当ダミー	-0.003		0.946	0.997
祖父母同居ダミー	0.089	***	0.122	1.093
保育外注ダミー	-0.126	***	0.134	0.881
相談者ありダミー	-0.531	*	0.005	0.588
定数	-1.375	***	0.000	0.253
Cox & Snell R ² 乗	0.003			
Nagelkerke R ² 乗	0.009			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもについてまわりの目や評価が気になる			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.309	***	0.000	0.734
多胎ダミー	0.161		0.214	1.175
第1回時の母親の年齢	-0.016	***	0.000	0.985
出産前学生+有職ダミー	0.033		0.412	1.034
現在学生+有職ダミー	-0.309	***	0.000	0.734
現在求職中ダミー	0.221	***	0.000	1.248
父=保育担当ダミー	0.042		0.270	1.043
祖父母同居ダミー	-0.089	+	0.063	0.914
相談者ありダミー	-0.502	***	0.000	0.605
定数	-1.085	***	0.000	0.338
Cox & Snell R ² 乗	0.005			
Nagelkerke R ² 乗	0.011			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「目が離せないのが気が休まらない」

第2回調査より加わった項目である。子どもについては、多胎児の方が選択率が高いのは、常識的に考えて納得できる。

母親は、年齢が高いほうがわずかに選びやすいほか、出産前は有職の方がわずかに、現在は無職の方が選択率が高くなっている。

社会的ネットワークでは、4回のみ父親が保育担当であるほうが選択率がわずかに低くなっており、3回のみ祖父母と同居しているほうがわずかに選択率が高くなっている。また、相談者はいないほうが選択率が高くなっている。これらから、援助者なく、専業で育児を行っているほうがこのような負担感を感じやすいということは言えるだろう。

また、第2回調査から一貫して選択率が下がってきており(34.1%→22.8%→15.2%表10参照)、子どもの成長につれて、負担が減ってきているのかもしれない。

表24 子育ての負担感の有無の回帰分析(目が離せないので気が休まらない)

(第3回調査)

	目が離せないので気が休まらない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.008		0.784
多胎ダミー	0.535 ***	0.000	1.708
第1回時の母親の年齢	0.009 *	0.001	1.009
出産前学生+有職ダミー	0.048 ***	0.089	1.049
現在学生+有職ダミー	-0.424 ***	0.000	0.654
父=保育担当ダミー	-0.079	0.002	0.924
祖父母同居ダミー	0.005 **	0.880	1.005
保育外注ダミー	-0.152	0.001	0.859
相談者ありダミー	-0.376 **	0.001	0.687
定数	-0.976 ***	0.000	0.377
Cox & Snell R ² 乗	0.010		
Nagelkerke R ² 乗	0.016		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	目が離せないので気が休まらない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.048	0.184	0.953
多胎ダミー	0.606 ***	0.000	1.834
第1回時の母親の年齢	0.006 *	0.087	1.006
出産前学生+有職ダミー	0.142 ***	0.000	1.152
現在学生+有職ダミー	-0.406 ***	0.000	0.666
現在求職中ダミー	0.071	0.149	1.074
父=保育担当ダミー	-0.090 **	0.003	0.914
祖父母同居ダミー	0.019	0.612	1.019
相談者ありダミー	-0.300 **	0.010	0.741
定数	-1.487 ***	0.000	0.226
Cox & Snell R ² 乗	0.006		
Nagelkerke R ² 乗	0.011		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない」

第3回調査から加わった項目である。子どもは兄弟姉妹がいないほうが選択率が低く、母親は無職のほうが選択率が高い(ただし、求職中のほうが高い)。

表25 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない)

(第3回調査)

	子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.542 ***	0.000	0.581
多胎ダミー	0.309	0.342	1.362
第1回時の母親の年齢	0.008	0.463	1.008
出産前学生+有職ダミー	-0.096	0.359	0.909
現在学生+有職ダミー	-0.604 ***	0.000	0.547
父=保育担当ダミー	-0.265 **	0.007	0.767
祖父母同居ダミー	-0.237 +	0.063	0.789
保育外注ダミー	-0.106	0.574	0.899
相談者ありダミー	-1.182 ***	0.000	0.307
定数	-2.731 ***	0.000	0.065
Cox & Snell R ² 乗	0.003		
Nagelkerke R ² 乗	0.020		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.538 ***	0.000	0.584
多胎ダミー	0.134	0.650	1.144
第1回時の母親の年齢	0.004	0.670	1.004
出産前学生+有職ダミー	-0.130	0.146	0.878
現在学生+有職ダミー	-0.280 **	0.004	0.756
現在求職中ダミー	0.336 **	0.007	1.399
父=保育担当ダミー	-0.110	0.194	0.896
祖父母同居ダミー	-0.413 ***	0.000	0.661
相談者ありダミー	-1.057 ***	0.000	0.347
定数	-2.523 ***	0.000	0.080
Cox & Snell R ² 乗	0.003		
Nagelkerke R ² 乗	0.016		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

祖父母と別居のほうが選択率が高く、相談者もないほうが選択率が高い。つまり、周囲の援助が得にくく、母親が子育てに集中し、かつ、他に子育ての経験がないほうが、親同士の人間関係なども悩むことが多いということである。これも、育児不安の諸研究で頻りに指摘される事象と一致している。

「子どもを一時的に預けたいときに預け先がない」

第3回調査から加わった項目である。子どもの数で差異は見られず、母親が出産前も現在も有職であるほうが選択率が低く、求職中の場合は選択率が高い。つまり、日ごろから子どもの預け先が問題となり、解決策を講じている有職層よりも、専業主婦層や、中でも現時点で職を探している場合に、急な援助が必要な際に困難を感じているようである。

また、当然の結果と言えるが、父親が保育を担当していないほうがないほうがわずかに選択率が高く、祖父母が別居の場合、保育を外注していない場合、相談者がいない場合に選択率が高い。

表26 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない)

(第3回調査)

	子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.023		0.978
多胎ダミー	-0.121		0.886
第1回時の母親の年齢	0.003		1.003
出産前学生+有職ダミー	-0.216	***	0.806
現在学生+有職ダミー	-0.605	***	0.546
父=保育担当ダミー	-0.069	*	0.934
祖父母同居ダミー	-0.860	***	0.423
保育外注ダミー	-0.292	***	0.747
相談者ありダミー	-0.860	***	0.423
定数	-0.709	***	0.492
Cox & Snell R ² 乗	0.026		
Nagelkerke R ² 乗	0.050		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.088	*	0.915
多胎ダミー	-0.237	+	0.789
第1回時の母親の年齢	0.002		1.002
出産前学生+有職ダミー	-0.218	***	0.804
現在学生+有職ダミー	-0.642	***	0.526
現在求職中ダミー	0.289	***	1.335
父=保育担当ダミー	-0.070	*	0.932
祖父母同居ダミー	-0.960	***	0.383
相談者ありダミー	-0.936	***	0.392
定数	-0.613	***	0.541
Cox & Snell R ² 乗	0.028		
Nagelkerke R ² 乗	0.055		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもが言うことを聞かない」

第3回調査から加わった項目である。第3回のみ、兄弟姉妹がいないほうがわずかに選択率が高くなっている。また、多胎児であるほうが選択率が高い。経験がないほうが子どもの言い分に振り回される可能性があると同時に、多胎児だと複数の要求があつてたいへんだということだろうか。

母親については、年齢が若い方がわずかに選択率が高く、出産前は有職、現在は無職の

ほうが選択率が高くなっている。やはり、専業で育児を担当しているほうが負担感が高まるという従来より指摘される傾向をここでも確認できる。

社会的ネットワークについては、第3回のみではあるが、保育を外注していたり、相談者がいたりしたほうが選択率が低い。しかし、祖父母と同居しているほうが選択率が高く、第3回のみであるが父親が保育を担当している方が選択率がわずかに選択率が高いなど、同様の解釈が難しい結果も出ている。身内で育児担当者が複数になると、子どもが誰によりよく従うかを比較してしまう機会が増えるのであろうか。

表27 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもが言うことを聞かない)

(第3回調査)

	子どもが言うことを聞かない			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.089	**	0.002	0.915
多胎ダミー	0.220	*	0.013	1.246
第1回時の母親の年齢	-0.026	***	0.000	0.975
出産前学生+有職ダミー	0.151	***	0.000	1.163
現在学生+有職ダミー	-0.284	***	0.000	0.753
父=保育担当ダミー	0.056	*	0.032	1.058
祖父母同居ダミー	0.105	***	0.001	1.110
保育外注ダミー	-0.103	***	0.017	0.902
相談者ありダミー	-0.295	**	0.013	0.744
定数	-0.184		0.218	0.832
Cox & Snell R ² 乗	0.007			
Nagelkerke R ² 乗	0.011			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもが言うことを聞かない			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.007		0.794	0.993
多胎ダミー	0.296	***	0.000	1.345
第1回時の母親の年齢	-0.015	***	0.000	0.986
出産前学生+有職ダミー	0.186	***	0.000	1.205
現在学生+有職ダミー	-0.227	***	0.000	0.797
現在求職中ダミー	0.080	+	0.052	1.083
父=保育担当ダミー	0.038		0.118	1.038
祖父母同居ダミー	0.112	***	0.000	1.118
相談者ありダミー	-0.125		0.205	0.883
定数	-0.453	***	0.001	0.635
Cox & Snell R ² 乗	0.005			
Nagelkerke R ² 乗	0.007			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもが病気がちである」

当項目は、本来、子どもの健康状態等を勘案して分析すべきであるが、ここでは他の項目と変数をそろえて分析した。興味深いことに、子どもの健康状態を考慮に入れなくとも、母親が若い、出産前は無職、現在は有職、父親が保育を担当しない、祖父母が別居（第4回のみ）、保育を外注といったばあいに選択率が高くなることがわかった。仕事を持っていて、子どもを外部に預けており、家族親族の助けがない場合、子どもが同じ頻度で病気になっても、負担感が増すということだろう。

表28 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもが病気がちである)

(第3回調査)

	子どもが病気がちである		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	0.096		1.100
多胎ダミー	-0.719	**	0.487
第1回時の母親の年齢	-0.028	***	0.972
出産前学生+有職ダミー	-0.283	***	0.754
現在学生+有職ダミー	0.517	***	1.677
父=保育担当ダミー	-0.166	**	0.847
祖父母同居ダミー	-0.107		0.898
保育外注ダミー	0.354	***	1.425
相談者ありダミー	-0.264		0.768
定数	-2.158	***	0.116
Cox & Snell R ² 乗	0.005		
Nagelkerke R ² 乗	0.018		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもが病気がちである		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.069		0.933
多胎ダミー	0.026	***	1.027
第1回時の母親の年齢	-0.031		0.969
出産前学生+有職ダミー	-0.136	**	0.873
現在学生+有職ダミー	0.270	***	1.310
現在求職中ダミー	0.435		1.545
父=保育担当ダミー	-0.146	*	0.864
祖父母同居ダミー	-0.126	***	0.882
相談者ありダミー	-0.003		0.997
定数	-2.260	***	0.104
Cox & Snell R ² 乗	0.002		
Nagelkerke R ² 乗	0.007		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもが急病の時診てくれる医者が近くにいない」

この項目も同様に、地域変数などを考慮する必要がある、次に述べるように、意義のある分析結果ではない。第3回と第4回で共通性のない結果もあるが、有為水準から判断しても、現時点で求職中である場合、祖父母と同居している場合は選択率が高いと言える。前者は、負担感が関係しているのかもしれない。後者は、同居率が高い地域が医療機関へのアクセスが不便である可能性があり、この結果からは確定的なことはいえない。

表29 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもが急病の時診てくれる医者が近くにいない)

(第3回調査)

	子どもが急病の時診てくれる 医者が近くにいない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.011		0.989
多胎ダミー	0.099		1.104
第1回時の母親の年齢	-0.011		0.990
出産前学生+有職ダミー	-0.090		0.914
現在学生+有職ダミー	0.160	*	1.174
父=保育担当ダミー	0.000		1.000
祖父母同居ダミー	0.261	***	1.298
保育外注ダミー	-0.151		0.859
相談者ありダミー	-0.248		0.780
定数	-2.834	***	0.059
Cox & Snell R ² 乗	0.001		
Nagelkerke R ² 乗	0.003		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもが急病の時診てくれる 医者が近くにいない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.018		0.983
多胎ダミー	0.105		1.110
第1回時の母親の年齢	-0.009		0.991
出産前学生+有職ダミー	-0.130	*	0.878
現在学生+有職ダミー	0.017		1.017
現在求職中ダミー	0.252	**	1.287
父=保育担当ダミー	-0.112	+	0.894
祖父母同居ダミー	0.267	***	1.305
相談者ありダミー	-0.468	*	0.626
定数	-2.583	***	0.076
Cox & Snell R ² 乗	0.001		
Nagelkerke R ² 乗	0.005		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもの成長の度合いが気になる」

第3回調査から加わった項目である。これも、精密な分析のためには、実際の成長に関する変数を加える必要がある。しかし、兄弟姉妹がいないほうが選択率が高く、育児経験が少ないほうが成長を気にしやすいことがわかる。ただし、同じ子どもが多い場合でも、多胎児であると選択率が高くなる。

母親については、有為水準にもばらつきがあるが、有職のほうがわずかに選択率が低くなる傾向がある。求職中だと選択率が高く、成長の度合いと直感的には関係性の薄い事項だが、求職中は全般的な負担感が増していると考えられる。

また、社会的ネットワークでは、第3回では父が保育を担当していたり、保育を外注していないほうが、第4回では祖父母と別居しているほうが選択率が高くなっている。後二者からは、他者の援助がないほうが成長を気にしやすいとも見て取れるが、相談者の有無が関係していないこともあり、確かなことはいえない。

表30 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもの成長の度合いが気になる)

(第3回調査)

	子どもの成長の度合いが気になる			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.467	***	0.000	0.627
多胎ダミー	0.599	***	0.000	1.820
第1回時の母親の年齢	-0.003		0.506	0.997
出産前学生+有職ダミー	-0.041		0.376	0.960
現在学生+有職ダミー	-0.180	**	0.002	0.835
父=保育担当ダミー	0.162	***	0.000	1.176
祖父母同居ダミー	-0.050		0.351	0.951
保育外注ダミー	-0.325	***	0.000	0.722
相談者ありダミー	-0.142		0.483	0.868
定数	-2.025	***	0.000	0.132
Cox & Snell R ² 乗	0.006			
Nagelkerke R ² 乗	0.014			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもの成長の度合いが気になる			
	B	有意確率	Exp (B)	
きょうだいありダミー	-0.470	***	0.000	0.625
多胎ダミー	0.686	***	0.000	1.986
第1回時の母親の年齢	0.005		0.326	1.005
出産前学生+有職ダミー	-0.089	*	0.044	0.915
現在学生+有職ダミー	-0.088	+	0.058	0.915
現在求職中ダミー	0.276	***	0.000	1.317
父=保育担当ダミー	-0.021		0.620	0.980
祖父母同居ダミー	-0.147	**	0.005	0.863
相談者ありダミー	0.084		0.635	1.088
定数	-2.327	***	0.000	0.098
Cox & Snell R ² 乗	0.005			
Nagelkerke R ² 乗	0.011			

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「しつけの仕方がわからない」

第3回調査から加わった項目である。子どもについては、兄弟姉妹がいないケース、第3回のみ多胎児のケースが選択率が高くなっており、育児経験がないほうが負担感が増すと言える。

母親は、年齢が若い方が選択率が高く、出産前は有職、現在は無職の方が選択率が高い。専業主婦が負担感が高いことがわかる。また、社会的ネットワークは選択に関係がないが、相談者がいないほうが選択率が高くなっており、常識的な結果と言える。

表31 子育ての負担感の有無の回帰分析(しつけのしかたがわからない)

(第3回調査)

	しつけのしかたがわからない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.478	***	0.000
多胎ダミー	0.363	**	0.005
第1回時の母親の年齢	-0.038	***	0.000
出産前学生+有職ダミー	0.417	***	0.000
現在学生+有職ダミー	-0.285	***	0.000
父=保育担当ダミー	0.033		0.384
祖父母同居ダミー	0.003		0.957
保育外注ダミー	-0.051		0.422
相談者ありダミー	-0.482	**	0.003
定数	-0.633	**	0.002
Cox & Snell R ² 乗	0.013		
Nagelkerke R ² 乗	0.029		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	しつけのしかたがわからない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.283	***	0.000
多胎ダミー	0.159		0.258
第1回時の母親の年齢	-0.034	***	0.000
出産前学生+有職ダミー	0.381	***	0.000
現在学生+有職ダミー	-0.242	***	0.000
現在求職中ダミー	0.082		0.231
父=保育担当ダミー	-0.047		0.256
祖父母同居ダミー	0.003		0.954
相談者ありダミー	-0.532	***	0.000
定数	-0.887	***	0.000
Cox & Snell R ² 乗	0.007		
Nagelkerke R ² 乗	0.016		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」(第4回のみ)

第4回調査から加わった項目である。子どもは、兄弟姉妹がいたほうがわずかに選択率が高く、多胎児で選択率が高い。子どもが多いほうが負担感が増すといえる。

また、母親の年齢が若い方がわずかながら選択率が高く、出産前有職であったほうが負担感がある。

社会的ネットワークでは、祖父母と別居していたり、相談者がいなくなったりすると選択率が高く、援助の存在が重要であることが示唆される。

表32 子育ての負担感の有無の回帰分析(気持ちに余裕をもって子どもに接することができない)

(第4回調査)

	気持ちに余裕をもって子どもに接することができない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	0.073	*	0.017
多胎ダミー	0.459	***	0.000
第1回時の母親の年齢	-0.007	*	0.011
出産前学生+有職ダミー	0.131	***	0.000
現在学生+有職ダミー	0.020		0.468
現在求職中ダミー	0.076	+	0.085
父=保育担当ダミー	0.040		0.117
祖父母同居ダミー	-0.107	***	0.001
相談者ありダミー	-0.532	***	0.000
定数	-0.583	***	0.000
Cox & Snell R ² 乗	0.003		
Nagelkerke R ² 乗	0.005		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもを好きになれない」

第3回調査から加わった項目である。選択率も低く、一貫した傾向は見られないが、第3回第4回とも、相談者がいない場合の選択率がかなり高くなっており、相談者の存在が重要であることが示唆される。

表33 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもを好きになれない)

(第3回調査)

	子どもを好きになれない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.271	0.180	0.762
多胎ダミー	0.379	0.524	1.460
第1回時の母親の年齢	-0.044	*	0.038
出産前学生+有職ダミー	0.134	0.509	1.143
現在学生+有職ダミー	-0.819	**	0.005
父=保育担当ダミー	-0.055	0.774	0.947
祖父母同居ダミー	-0.050	0.830	0.951
保育外注ダミー	-0.139	0.709	0.870
相談者ありダミー	-2.769	***	0.000
定数	-1.465	*	0.036
Cox & Snell R ² 乗	0.002		
Nagelkerke R ² 乗	0.046		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(第4回調査)

	子どもを好きになれない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.056	0.770	0.946
多胎ダミー	0.470	0.307	1.601
第1回時の母親の年齢	-0.009	0.630	0.991
出産前学生+有職ダミー	0.187	0.282	1.206
現在学生+有職ダミー	-0.056	0.757	0.945
現在求職中ダミー	0.241	0.351	1.272
父=保育担当ダミー	-0.165	0.319	0.848
祖父母同居ダミー	-0.228	0.278	0.796
相談者ありダミー	-2.385	***	0.000
定数	-2.858	***	0.000
Cox & Snell R ² 乗	0.002		
Nagelkerke R ² 乗	0.033		

+p<0.1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

「子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない」(第4回のみ)

対象子が就園年齢に達する第4回調査(3歳半)から加わった項目であり、選択率も低いものである。子どもの状況としては、兄弟姉妹がいない場合に選択率が高くなっており、経験がないほうが負担と感じるのかもしれない。

表34 子育ての負担感の有無の回帰分析(子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない)

(第4回調査)

	子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない		
	B	有意確率	Exp (B)
きょうだいありダミー	-0.262	***	0.001
多胎ダミー	0.124	0.599	1.132
第1回時の母親の年齢	0.005	0.493	1.005
出産前学生+有職ダミー	0.135	+	0.071
現在学生+有職ダミー	0.184	*	0.017
現在求職中ダミー	0.456	***	0.000
父=保育担当ダミー	-0.128	+	0.067
祖父母同居ダミー	-0.190	*	0.031
相談者ありダミー	-0.427	+	0.065
定数	-3.316	***	0.000
Cox & Snell R ² 乗	0.001		
Nagelkerke R ² 乗	0.007		

母親については、出産前も現在も有職であるほうが選択率が高く、求職中も高い。子どもが保育所・幼稚園に行くことを嫌がった場合、有職のほうが現実的な困難が生ずると考えられるため、この層の回答率が高くなっているであろう。

また、社会的ネットワークについては、父親が保育担当でない、祖父母と別居している、相談者がいないといった、援助ないほうが選択率が高いのも同様の事態を示しているように思われる。

3.3 各項目の関係

以上のような分析は、個々の項目に関する情報を提供してくれる一方で、負担感の全体像を拡散させる。そこで、最後に、現時点で分析可能なデータの中で、最も選択肢の多い第4回調査について、育児の負担感に関する項目すべて（「その他」を除いて18項目）を元に主成分分析を行う。それによって、一言で負担感と語られる事象をいくつかのパターンに分けることを試みたい。

バリマックス回転を用いた主成分分析の結果が表35である⁹。第3成分までで情報全体の3割弱を説明していることになる。一般に、社会調査においては、0.3以上が値が大きいと見なされることから、各成分において因子負荷量が0.3以上の設問に網掛けを施した。

これらから考えると、第1成分は、「自分の自由な時間が持てない」(0.658)、「子育てによる身体の疲れが大きい」(0.658)、「仕事や家事が十分にできない」(0.553)、「目が離せないで気が休まらない」(0.437)、「子育てで出費がかさむ」(0.388)、「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」(0.301)といった項目で構成されており、時間やお金、身体的疲労など、子どもを持つことによって自分の生活から物理的、具体的に奪われるものがあることへの負担感を表している。「自己の自由の喪失に関する負担感」と言えよう。

第2成分は、「子どもについてまわりの目や評価が気になる」(0.587)、「子どもの成長の度合いが気になる」(0.584)、「しつけのしかたがわからない」(0.581)、「子どもが言うことを聞かない」(0.537)、「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」(0.437)、「目が離せないで気が休まらない」(0.348)などで構成されており、子育てにおいて、自らの価値基準が確立できておらず、子どもや周囲に振り回されることの負担感を示している。「子育ての基準未確立に伴う負担感」と言えよう。

第3成分は、ほぼ、「しつけのしかたが家族内で一致していない」(0.747)、「配偶者が育児に参加してくれない」(0.738)の2項によって構成されており、子育てにおける家族との協力体制に関する不満からくる負担感を示している。「家族の協力体制に関する負担感」と言えよう。

⁹ 主成分分析、および損結果を用いた後述の重回帰分析はすべてSPSS14.0を用いて行った。

表35 子育ての負担感項目主成分分析結果(第4回)

成分	初期の固有値		
	合計	分散の%	累積%
1	2.43	13.52	13.52
2	1.29	7.19	20.71
3	1.14	6.32	27.03
4	1.09	6.08	33.11
5	1.03	5.72	38.83
6	1.00	5.56	44.39
7	0.98	5.44	49.84
8	0.96	5.33	55.17
9	0.93	5.16	60.33
10	0.89	4.93	65.25
11	0.87	4.85	70.10
12	0.87	4.81	74.90
13	0.82	4.53	79.44
14	0.78	4.32	83.76
15	0.76	4.21	87.97
16	0.75	4.18	92.14
17	0.73	4.08	96.22
18	0.68	3.78	100.00

回転後の成分行列(第3成分まで表示)

子育てにおける負担感	第1成分	第2成分	第3成分
子育てによる身体の疲れが大きい	0.658	0.098	-0.006
子育てで出費がかさむ	0.388	-0.080	-0.050
自分の自由な時間が持てない	0.658	0.013	0.034
配偶者が育児に参加してくれない	0.132	-0.011	0.738
しつけのしかたが家族内で一致していない	-0.029	0.149	0.747
仕事や家事が十分にできない	0.553	0.035	0.104
子どもについてまわりの目や評価が気になる	0.016	0.587	0.010
目が離せないのが気が休まらない	0.437	0.348	0.003
子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない	-0.009	0.093	0.011
子どもを一時的に預けたい時にあずけ先がない	0.259	0.013	0.021
子どもが言うことを聞かない	0.269	0.537	0.098
子どもが病気がちである	0.064	0.102	0.071
子どもが急病の時診てくれる医者が近くにいない	-0.026	-0.043	0.100
子どもの成長の度合いが気になる	-0.080	0.584	-0.115
しつけのしかたがわからない	0.012	0.581	0.104
気持ちに余裕をもって子どもに接することができない	0.301	0.437	0.195
子どもを好きになれない	0.030	0.090	0.008
子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない	0.057	0.017	-0.004

回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

次に、これらの各成分の成分スコアを従属変数に、3.2の各項目のロジスティック回帰分析と同様の項目を独立変数にして、第4回の回答者=保育者=母のケースすべてについて、重回帰分析を行った。それによると、以下のように、同じ「負担感」といっても、その内容によって、選択者の傾向がやや異なることがわかる。

表36は、第1成分(自己の自由の喪失に関する負担感)の重回帰分析の結果である。ほ

ほとすべての項目が有為であるが、係数の符号に着目してみると、きょうだいがいない、多胎児でない、母の年齢が高め、母が出産前有職、母が現在有職、現在求職していない、父親が保育担当、祖父母が同居、相談者がいる、といった場合のほうが、そうでない場合より第1成分の得点が高いことがわかる。つまり、これらの属性を持つ母親=保育者が、そうでない人より、自己の自由の喪失に起因する負担感を表明しやすいということがわかる。

表36 第1成分(自己の自由の喪失に関する負担感)に関する重回帰分析

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	-0.690	0.058		-11.864	0.000 ***		
きょうだいありダミー	-0.042	0.013	-0.018	-3.329	0.001 ***	0.946	1.058
多胎ダミー	-0.123	0.037	-0.018	-3.333	0.001 ***	0.993	1.007
第1回時の母親の年齢	0.004	0.001	0.017	3.187	0.001 **	0.994	1.006
出産前学生+有職ダミー	0.083	0.011	0.042	7.383	0.000 ***	0.868	1.153
現在学生+有職ダミー	0.039	0.012	0.019	3.360	0.001 **	0.837	1.194
現在求職中ダミー	-0.116	0.019	-0.034	-6.289	0.000 ***	0.930	1.076
父=保育担当ダミー	0.184	0.011	0.093	17.331	0.000 ***	0.974	1.027
祖父母同居ダミー	0.087	0.013	0.036	6.748	0.000 ***	0.963	1.038
相談者ありダミー	0.475	0.044	0.057	10.769	0.000 ***	0.997	1.003

同様に、第2成分(子育ての基準未確立に伴う負担感)では、多胎児である、母の年齢が高め、母が出産前有職、母が現在無職、現在求職している、父親が保育担当、祖父母と同居していない、相談者がいない、といった場合のほうが、子育ての基準未確立に起因する負担感を表明しやすいと言える。

表37 第2成分(子育ての基準未確立に伴う負担感)に関する重回帰分析

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	-0.157	0.059		-2.668	0.008 **		
きょうだいありダミー	0.002	0.013	0.001	0.171	0.865	0.946	1.058
多胎ダミー	0.301	0.037	0.043	8.053	0.000 ***	0.993	1.007
第1回時の母親の年齢	0.009	0.001	0.041	7.723	0.000 ***	0.994	1.006
出産前学生+有職ダミー	0.097	0.011	0.049	8.539	0.000 ***	0.868	1.153
現在学生+有職ダミー	-0.069	0.012	-0.033	-5.776	0.000 ***	0.837	1.194
現在求職中ダミー	0.047	0.019	0.014	2.524	0.012 *	0.930	1.076
父=保育担当ダミー	0.028	0.011	0.014	2.589	0.010 *	0.974	1.027
祖父母同居ダミー	-0.157	0.013	-0.065	-11.965	0.000 ***	0.963	1.038
相談者ありダミー	-0.132	0.045	-0.016	-2.965	0.003 **	0.997	1.003

第3成分(家族の協力体制に関する負担感)でも同様の分析を行うと、きょうだいがい

ない、多胎児である、母の年齢が低め、母が出産前有職、母が現在無職、求職中、父親が保育担当、祖父母と同居、相談者がいない、といった場合のほうが、家族の協力体制に起因する負担感を表明しやすいといえる。

表38 第3成分(家族の協力体制に関する負担感)に関する重回帰分析

	非標準化係数		標準化係数	t	有意確率	共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
(定数)	0.350	0.059		5.911	0.000 ***		
きょうだいありダミー	-0.094	0.013	-0.040	-7.349	0.000 ***	0.946	1.058
多胎ダミー	0.179	0.038	0.025	4.758	0.000 ***	0.993	1.007
第1回時の母親の年齢	-0.008	0.001	-0.035	-6.596	0.000 ***	0.994	1.006
出産前学生+有職ダミー	0.066	0.011	0.033	5.803	0.000 ***	0.868	1.153
現在学生+有職ダミー	-0.106	0.012	-0.051	-8.864	0.000 ***	0.837	1.194
現在求職中ダミー	0.044	0.019	0.013	2.341	0.019 *	0.930	1.076
父=保育担当ダミー	0.038	0.011	0.019	3.507	0.000 ***	0.974	1.027
祖父母同居ダミー	0.049	0.013	0.020	3.709	0.000 ***	0.963	1.038
相談者ありダミー	-0.070	0.045	-0.008	-1.570	0.116	0.997	1.003

これらをまとめると、以下のように考えられる。第1の「自己の自由の喪失に関する負担感」は、子どもの数も少なく、子育てに関する社会的ネットワークも充実しているが、母親の年齢が高く職業を持っている場合に、強く感じる負担感である。それに対して、第2の「子育ての基準未確立に伴う負担感」は、多胎児という特殊ケースの場合や、専業主婦層（しかも、出産前は有職だったり、現在求職中であったりするほうがより負担感を感じている）で、父親の手助けはあるものの、祖父母との同居による援助が受けにくく、悩みの相談者もない場合に、強く感じる負担感であると言える。第3の「家族の協力体制に関する負担感」は、多胎児の場合や、母親が若く、他の子どももおらず、育児経験が少なく、かつ、専業主婦であり、父親や同居祖父母の援助が受けられる一方、それらの人々と齟齬があった場合に悩みを相談できる人がいない場合に、強く感じる負担感である。

それぞれ、有職層の負担感、孤立した専業主婦層の負担感、若く親族との関係に悩む専業主婦層の負担感、と言えるかもしれない。本調査を元に、何らかの育児支援施策を模索する場合は、このような負担感のタイプと、それぞれに悩む母親のタイプの違いに気を配る必要があるだろう。

参考文献

金子隆一・福田節也 2005「21世紀出生児縦断調査における脱落要因の分析」『パネル調査（縦断調査）のデータマネジメント方策及び分析に関する総合的システムの開発研究』厚生労働科学研究費平成16年度報告書

厚生労働省官房統計情報部 2003『第1回 21世紀出生児縦断調査（平成13年度）』

厚生労働省官房統計情報部 2004『第2回 21世紀出生児縦断調査（平成14年度）』

厚生労働省官房統計情報部 2005『第3回 21世紀出生児縦断調査（平成15年度）』

元森絵里子 2006「『21世紀出生児縦断調査』における保育担当者の意識分析に向けて」『パネル調査（縦断調査）のデータマネジメント方策及び分析に関する総合的システムの開発研究』厚生労働科学研究費平成17年度報告書

西野淑美 2006「21世紀出生児縦断調査における脱落・居住地移動・復活サンプルの分析」『パネル調査（縦断調査）のデータマネジメント方策及び分析に関する総合的システムの開発研究』厚生労働科学研究費平成17年度報告書